

蘇曼殊の「本事詩十章」について

荒井 礼

はじめに

蘇曼殊（一八八四〜一九一八）、名は戩^ま、字は子毅、後に字玄瑛、曼殊は法号。日本の横浜に生まれる。広東出身の商人蘇傑生とその妾の妹である河合若^{わか}との間に生まれた。曼殊は私生児であり、混血児でもあった。この特殊な生まれのせいから、母子は早々に蘇家を出ている。その後、曼殊は広東の家に連れ戻されたが、母が蘇家の門をくぐることは二度となかった。

蘇曼殊の出生については、混血児説（章炳麟「曼殊遺画弁言」など）のほか、日本人説（柳亜子「蘇玄瑛新伝」など）がある。柳亜子などは、はじめ混血児説を唱え、その後「蘇玄瑛新伝」で日本人説を、そして「蘇曼殊伝略」で再び混血児説を提唱した。曼殊の妹蘇惠珊氏の「亡兄蘇曼殊的身世——致羅孝明先生長函¹」が発表されて以降は混血児

説が有力になっている。²生前に親交のあった柳亜子ですらなかなか意見を定められなかった曼殊の出生も、これが一応は決着した。百年ほど前の人で、同時代を生きた柳亜子や陳去病などが彼の研究に乗り出していったというのに、こゝうもプロフィールが一定しなかったのは不思議なことである。しかし、その原因を作ったのは蘇曼殊自身であった。蘇曼殊は自身の特殊な生い立ちに関して、友人たちにある程度仄めかしていたようだが、詳細には語っていない³。それどころか、自ら混乱を招いていたように見える。

彼の自伝的小説と見做される『断鴻零雁記』では、主人公は中国で育った日本人ということになっていて、生き別れた日本人の母親に逗子まで会いに行く描写がある。訳詩集『潮音』⁴の跋文では、彼は日本人で五歳まで江戸で暮らしていたことになっている。蘇曼殊日本人説の根源はほかでもない蘇曼殊自身だったのである。では、結局日本人説が

正しいのかという点、そうではない。飯塚朗氏は様々な資料を閲覧したうえで、「曼殊はとくに自分が日華の混血児であるということを知っていたと見たい」（飯塚氏著書二八九頁）と述べ、蘇曼殊が十六歳のとき、彼が通った横浜の大同学校で教師が「相子（混血児）」に手を挙げさせたところ、曼殊も手を挙げたという話を紹介する。彼は自分が混血児であると理解していた可能性は十分にある。それにもかかわらず、彼の生い立ちについて種々の憶測が浮上したのは、彼が自身の詩文や小説で、自分のプロフィールをさもありそうなふうにならして仕上げていたからにほかならない。そしてそれは、自分にとって都合の良いプロフィールであったはずである。だからこそ、彼は友人たちに対して敢えて真実を口にするようなことはしなかったのである。「本事詩十章」は、蘇曼殊が日本における自身の経験を描出した作品である。しかも、自伝的作品とされてきた『断鴻零雁記』（一九一二年より執筆）などよりも早い段階でまとめられ、なおかつ、『断鴻零雁記』と重なる記述も多いので、最も初期の自伝的作品と見做せるのだが、従来研究対象とはされてこなかった。本論はこの自伝的作品を通して、蘇曼殊がどのように自己をとらえ、それを描写していたのか、この連作の発表によって何を伝えようとした

のかを考察する。底本には柳亜子編『蘇曼殊全集』（中国書店、一九八五。以下『全集』と略称）を用いる。本作には曼殊の自注が存在するが、『全集』には其七にしか見えない。そのため、自注は邵盈午注『蘇曼殊詩集』（北京出版集团公司北京十月文艺出版社、二〇一三）に拠った。⁽⁵⁾

一、「本事詩十章」の内容について

「本事詩十章」は、柳亜子の説によれば一九〇九年前半に制作された。⁽⁶⁾ 題名は本づく故事のある詩の意で、唐・孟棻の『本事詩』に倣ったものと考えられるが、孟棻の著作が唐代の著名人の故事を綴っているのとは違い、この詩は蘇曼殊自身の事を詠じている。連作の多くに女性の描写が見えるのが一つの特徴である。そのため、従来は女性を主題とした作品としてとらえられてきた。柳亜子は日本の歌妓百助のために作られたものと見做し、熊潤桐はその詩の一部は静子という日本人女性を詠じたものとし、周作人は理想の女性を詠じたものであるという。⁽⁷⁾ 確かに、この連作に蘇曼殊と関係のある女性の影を見出すことはできる。しかし、特定の誰かのために作られたと見るよりは、蘇曼殊の日本での経験を綴った作品と見做すほうが穏当であると考える。詩中には、「八雲箏」（其一）・「番茶」（其二）・「華

「巖瀑布」(其五)・「尺八簫」・「桜花」(其九)など日本特有のものが登場するのも一つの特徴であり、このことは、「本事詩十章」が彼の日本での経験を中心に作られたものであることを証明する。例として其二を挙げる。

①丈室番茶手自煎　　丈室　番茶　手自ら煎る
語深香冷涕潸然　　語ること深く　香冷かにして　涕

潸然たり

生身阿母無情甚　　生身の阿母　無情なること甚し
為向摩耶問夙縁　　為なに摩耶まに向かひて夙縁を問ふ

蘇曼殊は日本に滞在中、日本人の母親と会っていた。⁽⁸⁾これはその時のことを詠じたものである。第一句の「丈室」は維摩丈室のことで狭い部屋を意味する。第三句の「阿母」は母親のことを俗っぽく言ったもの。「第四句」の「摩耶」とは釈迦の母親である摩可摩耶のこと。柳亜子は「本事詩」が百助を詠じたものであることの証拠として、この詩の後半二句を挙げている。⁽⁹⁾しかし、「丈室」が維摩詰に関係する語であることを考慮すれば、この詩の主人公は男性と見るべきである。

最も注意したいのは、「阿母」と「摩耶」、母親を意味する語を二つ用いていることである。この二つを同等に扱ってもよいものであろうか。①で母を意味する語を、わざわざ

ざ言い換えて用いているのには、ニュアンスの違いを持たせるためではないか。甚だ無情である「生身の阿母」に対して、釈迦の母親である「摩耶」を置いている。これは「無慈悲」と「慈悲」の対比であると言える。

柳亜子の「蘇曼殊伝略」によると、蘇曼殊の産みの母である河合若は産後すぐに日本へ帰り、残された曼殊の世話には、河合若の姉河合仙に託されたという。⁽¹⁰⁾つまり、曼殊には産みの親(河合若)と育ての親(河合仙)がいることになる。そして、河合若とは幼いころに別れて以来、再び会うことはなかった。この点は、異説の多い伝記でも共通している事である。それならば、日本で再会した母というのは、育ての母ということになる。蘇曼殊にとって幼い自分と別れて、以後会うことのなかった産みの母を無情と感じるのは無理なきことである。すなわち、無情なること甚だしい「阿母」は生母たる河合若、「摩耶」は自らを養育してくれた母河合仙であると解釈することができる。第四句で「夙縁を問ふ」というのも、曼殊自身と河合姉妹の因縁について問いただしていたと見える。この「本事詩」がただの恋愛詩ではなく、蘇曼殊自身の経験を述べたものであることが分かる。しかも、そこには彼の存在とか個性とかいったものを決定づける重要な成分も含まれている。

次に恋愛詩的要素を含む作品を挙げたい。こうした作品が含まれることも「本事詩」の大きな特徴の一つであり、曼殊の女性に求める理想が窺えるためである。

② 烏舎凌波肌似雪

烏舎波を凌ぎて 肌 雪に似たり

親持紅葉索題詩

親ら紅葉を持ちて詩を題せんこと
を索む

還卿一鉢無情涙

卿に還す 一鉢無情の涙

恨不相逢未剃時

恨むらくは 未だ剃せざる時に相
逢はざりしを(其六)

インド神話の暁紅の女神ウシャスのような女性が縁結びの詩を求めてくる。¹¹しかし、蘇曼殊は自身が仏に帰依した身だからと、女性の思いには応じない。「烏舎」は自伝的小説『断鴻零雁記』第十二章において、主人公の従姉静子の美貌と学識を称える際、比較の対象として登場する。主人公の母はこの静子を娶るよう迫るが、主人公は出家した身だからと縁談を断る。②は登場人物の性質・実らざる恋を描いている点が自伝的小説と共通する。

③ 相憐病骨軽於蝶

相憐れむ 病骨の蝶よりも軽きを

夢入羅浮万里雲

夢は入る 羅浮 万里の雲

贈爾多情書一卷

爾に贈る 多情の書一卷

他年重檢石榴裙

他年 重ねて検せん石榴裙(其七)

「羅浮」は広東省増城市にある山。梅の名所。固有の蝶が生息しており、その蝶は麻姑仙の衣服が変化したものであるという伝説もある(清・屈大均『広東新語』巻二十四)。「多情書」とは、インドのグプタ朝の詩人カーリダーサの戯曲『シャクンタラー姫』(辻直四郎訳、岩波書店、一九七七がある)を指す。¹³シャクンタラーとドゥフシャンタの恋と別れ、そして再会を描く。詩は、「多情書」を贈られた女性が蘇曼殊との情事を思い出して涙し、いつかその涙痕が染み込んだ「石榴裙」を蘇曼殊が見て感慨を催すことになるであろうと結ぶ。¹⁴「多情書」を贈られた相手は中国の羅浮山のあたりにいることが推測できるので、③は「本事詩」が日本の百助のために作られたという説を否定する根拠にもなる。

②と同様に、③に描かれる女性像からも他の蘇曼殊作品に登場する女性たちを想起することができる。女性が中国の羅浮山に居ること、そこが梅の名所であることから、『断鴻零雁記』の主人公の許嫁であった雪梅が想起される。名前に「梅」字があり、彼女が主人公と再会したのは羅浮山のある広東省だったからである。ただ、雪梅がサンスクリットを理解できたとは考えられないので、漢文訳が存在しない限り彼女が実際の相手だとは断定しがたい。『シャ

クンタラー姫』には英訳が存在していたので、それならば蘇曼殊と交流のあったスペイン人女性雪鴻（ルビは飯塚氏著作に拠る）が考えられるが、彼女は香港に住んでいたというので場所的には合致しない。

「本事詩」に登場する女性は右に見てきたように実態がつかめないところがある。そもそも女神ウシヤスのようであるとか、サンスクリットもしくは英文で書かれた「多情書」を解し、則天武后がしたように「石榴裙」を恋人に贈るなど、「本事詩」の女性像は才色兼備に過ぎて現実離れた印象がある。これに関して周作人が興味深い見解を示している。

曼殊の文中に説かれる百助や静子には幾つかの共通点が見える。これは修辞上の重複であって、曼殊には胸中に抱くおおまかな理想の美人像があり、その意中の女性を描く際にはいつも似たような話柄を用いるのであるが、その人物が何者かなどは問題にはしないのである。……女郎・サンスクリット・詩画（及び八宝飯？）は、みな曼殊の愛好するもので、チャンスさえあればそれらを一括りにして提出するのである。調筆の人と『シャクンタラー』、静子と『パーニニ八部書』などは、すべて彼の心を満足させる夢想であり、われ

らはそれを見て面白いものだと思いをこぼすのである。⁽¹⁵⁾つまり、蘇曼殊作品に登場する女性たちはみな理想の女性像を描出したのであって、実体がないというのである。周作人の説は可能性としては十分にありうるものである。

しかし、彼の母親が登場する①の描写を考慮すると、そのすべてが虚構であるとも考えられない。本作は実際の経験に潤色を加えたものと見るほうが、より妥当である。それならば、③に見える女性像にも些か説明がつく。③からは複数の女性像が想起できた。これは、複数の女性との出来事を掛け合わせた結果であると考えられる。そして、これらの女性像が『断鴻零雁記』に於いて雪梅・雪鴻、そして静子の個性に反映されていたのである。⁽¹⁶⁾

二、修辞上の重複

周作人が「修辞上の重複」と指摘したように、蘇曼殊は言葉や設定の使いまわしをよく行う。その現象は「本事詩」にも現れている。すでに②③で見た『断鴻零雁記』との共通性がこれにあたるほか、別の詩に用いられている句と同様の句が、「本事詩」にも用いられていることがある。例えば其一の前半二句、

④ 無量春愁無量恨 無量の春愁 無量の恨み

一時都向指間鳴 一時に都て指間に向いて鳴る

日本で病を患っている時、女性の奏でる「八雲箏（八雲琴）」の音色を聞いて、悲しみや恨みが無限に湧いてくるといった内容である。この前半二句とほぼ同じ句が、「題百助眉史小影片寄天笑（百助眉史の小影片に題し「包」天笑に寄す）」（『全集』第一冊、一六三頁）と題する詩にも見える。

⑤無限春愁無限恨 無限の春愁 無限の恨み

一時都向指間鳴 一時に都て指間に向いて鳴る

「無量」が「無限」になつているほかは④と変わらない。内容も女性の箏の音色を聞いて涙を流すというもので、④と同じである。蘇曼殊の言に拠ると、この詩はもともと「静女調箏図」いう画に題したものであったという⁽¹⁷⁾。このように、「本事詩」と同じ内容でありながら、題に女性が登場する別詩が存在することが、後年、「本事詩」が女性の為に作られたと解される要因になったのだと言える。

次に「本事詩」其十を挙げる。

⑥九年面壁成空相 九年の面壁も空相と成る

持錫帰来悔晤卿 錫を持ち 帰り来たりて 卿に晤

ふを悔ゆ

我本負人今已矣 我れ本より人に負く 今 已んぬ

るかな

任他人作楽中箏 他の人の楽中の箏と作るに任す

この詩は、自注に「南漢黄荆詞云、『願作楽中箏、得近玉人織手子』（南漢の黄荆の詞に云ふ、『願はくは楽中の箏と作り、玉人の織手子に近づくを得ん』と）」とあり、心を寄せる女性を想定した作品であると解せる。詩では、この女性に会ったことを後悔している。それは、せっかくの「面壁（禪の修行）」が「空相（無駄）」になつてしまったからだという。次に「憶劉三・天梅」詩を挙げる。

⑦九年面壁成空相 九年の面壁も空相と成る

万里帰来一病身 万里 帰来す 一病身

涙眼更誰愁似我 涙眼 更に誰れか愁ふること我れ

に似たる

親前猶自憶詞人 親前 猶ほ自ら詞人を憶ふ

第一句は⑥と全く同じである。しかし、⑦は母親と再会したときのことを詠じたもの（注8参照）であり、⑥とは詠じられている対象が違う。よって、長年の修行も無駄になったと涙するのは、母親と再会した為ということになる。また、自注には、「余れ出家して剛に九年」とある。「九年面壁」が実数であれば、出家の年にも異同が生じる。まったく同じ言葉を用いた句でも、詩題や他の句との組み合わせ

せて内容が変わるといふのは興味深い現象であり、斬新な作詩法ではある。しかし、これが自身の経歴を混乱させてしまっていることに、果たして本人は気づいていたのだろうか。恐らくは、気づく気づかない以前に、こうしたことには無頓着であったのではないだろうか。出家の年を問題に挙げれば、一九一二年発表の「潮音跋」では十二歳の時と言っている⁽¹⁸⁾。

この「潮音跋」は曼殊日本人説の発端となったものであるが、これに対して劉三は曼殊にこう問い質している。

「わたしたちは今まで君が中国と日本の混血児であると理解していたが、この飛錫の文章（筆者注記：「潮音跋」のこと）に拠れば、君は完全なる日本人になってしまっている。これはいったいどういふことなのだ。本当のところを言ってくれたらそれで済むのだが」と。これに蘇曼殊は、「こんなことがいったいどんな問題になりましようか。そんな真剣にならなくてもよいですよ」と答えた⁽¹⁹⁾。

出自に関してはデリケートな問題であるから答えをはぐらかしたという見方もできなくはない。しかし、すでに見たように、蘇曼殊は同じ文句や設定の使いまわしをよく行っている。④⑤のようにまったく同じ内容を持つものもあれば、②③に見える女性像のように『断鴻零雁記』のヒロ

インたちにその性格が受け継がれているものもある。甚だしいのは、⑦のように生き別れた母親との再会という一大事さえ、⑥では一女性との恋愛事に転化させている。彼にとつては、そのデリケートな出自さえも自己の文学に花を添える演出の一環でしかなかったのかも知れない。「修辞上の重複」という現象は、曼殊がこうしたことを平然と行える性格の持ち主であることを象徴している。そして、この性格が、己の経歴さえも文学の好材料として用い、時には潤色も厭わない、特殊な文学観を形作つているといえる。

三、蘇曼殊とバイロン

「修辞上の重複」は、蘇曼殊の作品を見るうえで欠くことのできない特徴である。彼の作品を虚構化し曖昧化している一要因がこの特徴にもあるからである。虚構であることが許容される今日的な小説であれば、これは大した問題にはならない。しかし、「本事詩」のような自分の身の上を語る詩文において、こうした手法を取るのとは不可解である。多少の誇張が含まれるのは良いとしても、②③に見るような女性たちとの恋愛はあまりにも現実離れし過ぎていし、母親との再会を一女性との情事として改変するのは「本事」の域を超えている。「本事詩」においてこのような

描写を行ったのは、この詩の読者たちに自分を紹介する目的のほか、さらに何かしらの効果をもたらされることを期待してのことだったのではないか。

「本事詩」には、蘇曼殊が影響を受けた詩人について述べた一首がある。其三、

⑧丹頓裴倫是我師 丹頓^{ダンテ} 裴倫^{バイロン} 是れ我が師

才如江海命如糸 才は江海の如く 命は糸の如し

朱弦休爲佳人絶 朱弦 佳人の為に絶つを休むるも

孤憤酸情欲語誰 孤憤酸情 誰に語らんとか欲する

イタリアのダンテとイギリスのバイロンを師と仰いでいる。後半は艶詩的な表現にも見えるが、「朱弦」の句は伯牙と鍾子期の故事を踏まえたものであり、「佳人」はダンテとバイロンを指している。彼らがいらない今、文字を著すことをやめるでもないが、我が憤懣を誰に打ち明けたらよいのかと詩は結ばれる。西洋の詩人に対する曼殊の傾倒が窺える。とりわけ、バイロンに関しては『拜輪詩選』を編

纂し、その訳詩の数も他の外国の詩人たちと比べて最も多く、友人に与えた手紙の中で、屈原と李白に並ぶ詩人であると述べるなど、最も傾倒していたことが窺える。曼殊はバイロンのどこに惹かれたのか。

笠原順路編『対訳バイロン詩集』（岩波書店、二〇〇九）

の「バイロン略伝」によって、その生涯を見ると、蘇曼殊との共通点がいくつも見られる。以下、三つの項目を立て、バイロンに関する事柄と蘇曼殊との共通点を指摘する。

1、幼少期

バイロン（一七八八〜一八二四）は父親の後妻の子として生まれる。生まれつき右足が彎足であった。父親の放蕩で借金があり、その取り立てを苦にして母親はバイロンと乳母を連れて故郷に帰る。父親は二年後に死去。その後、バイロンが爵位を継ぐと、バイロン家伝来の館に移り住む。十三歳の時、乳母の虐待を避けるため、学校に入学した。蘇曼殊が生後すぐに母親と共に母の実家に帰ったこと、生来の欠陥（曼殊―混血児・バイロン―彎足）、家で虐待を受けていたことが共通する。

2、作品に対する自己体験の反映

笠原氏に拠ると、「1809年7月、ケンブリッジ以来の友人ホブハウス（および召使三名）と大陸旅行に出かける。……スペインで初めて見た闘牛がバイロンに与えた驚きは、のちに本書に収録した『貴公子ハロルドの巡礼』第1巻の一部となる。……こうした異国での体験は、人生に

対する洞察を深めたのと同時に、詩人バイロンを形成するのに必要な原体験を与えた」という。

蘇曼殊も中国国内はもとより、日本・シヤム・セイロン・ジャワなどを訪れている。日本での経験が作品に反映されているのはすでに見てきたとおりである。

3、作品に見える豊富な女性遍歴

笠原氏に拠ると、「デカダンを銜つたこのダンディ貴族詩人の周りには、社交界の多くの女性たちが、既婚、未婚を問わず、……群がってきた。こうした、世事に長けた貴婦人たちの中に、生真面目な娘アナベラ・ミルバンク (Annabella Milbanke) や、すでにリー大佐夫人となっていた異母姉のオーガスタも名を連ねていた」といい、「このアナベラとの関係、オーガスタとの関係は、これ以後のバイロン作品の中で幾度となく繰り返されるテーマとなる」という。

蘇曼殊作品には何人もの女性が登場する。しかもそのほとんどが主人公に心を寄せている。「本事詩」においても複数の女性像が確認できた。バイロンとの共通点として特に注目したいのは、親族の女性との関係(曼殊「小説の主人公」——従姉静子・バイロン——異母姉オーガスタ)である。

バイロンの『貴公子ハロルドの巡礼』の一部について、笠原氏は「作者バイロンの思わせぶりの自己虚構化。以後55連まで、異母姉オーガスタに言及している、と作者のスキヤンダルを知っている当時の読者が考えることを計算して書かれている」(四十一頁)と注する。こうしたバイロンの作詩法は、曼殊のそれと酷似する。「本事詩」は、そこに語られた種々の女性像から、『断鴻零雁記』に登場する女性たち(特に静子)や日本で馴染みになったことを仄めかせる歌妓百助を読者に連想させる思わせぶりの構成であった。

以上の共通点を見ると、特に作品の構成において蘇曼殊がバイロンの影響を受けていたことが窺える。⑧に「命は糸の如し」とあったり、訳詩集『潮音』にはバイロンの年表が付されていたり(飯塚氏著書三五〇頁)、劉半農に与えた手紙に『With Byron in Italy』を薦めたりしていることから(『全集』第一冊、三二六頁)、曼殊がバイロンの経歴に詳しく分かったことが分かる。曼殊は初め、幼少期の共通点からバイロンに親近感を覚え、その詩を読み翻訳するうちに、その生涯と作品構成に憧憬を抱き、それを蘇曼殊作品に再現しようとしたのではないか。「修辭上の重複」とまでは言えないが、内容上の重複、もしくは同調といえる

ものが訳詩に見える。

⑨ 阿母沈哀恫 阿母 哀恫に沈み
嗟猶来無遠 嗟きて猶来 遠り無しと
……

我若幼童愚 我れ童愚に効ふが若く

流涕当無算 流涕して当に算ふる無かるべしと

〔去国行 (My Native Land-Good Night)〕、『全集』第
一冊)

⑩ 壮士彈坎侯 壮士 坎侯を弾き

静女揄鳴箏 静女 鳴箏を揄る

〔哀希臘 (The Isles of Greece)〕、同右)

⑪ 曾用繫卷髮 曾用て用て 卷髮を繫ぐ

貴与仙蛻倫 貴きこと仙蛻と倫す

〔答美人贈束髮種帶詩 (To A Lady)〕、同右)

⑨の場面は①の母子再会の場面を彷彿とさせる。⑩は④のような箏を弾く女性像と通じる。⑪は③の女性を女神に比していた表現と類似する。『拝輪詩選』は一九〇八年に出版され、序文は一九〇六年に書かれている(飯塚氏著書三四九頁)。訳詩は「本事詩」よりも前に行われていたことになる。それならば、「本事詩」もバイロン作品の影響を受けていた可能性は十分にある。特に、⑩の「静女揄

鳴箏」を見るに、蘇曼殊作品における「調箏の人」のイメージの原点はここにあると言える。他作品に見える完璧な女性像もバイロンの生涯からヒントを得たのではあるまいか。

おわりに

蘇曼殊の「本事詩十章」は自身の出生(①)や文学的好を示したものの(⑧)、日本での見聞を記したもののなど、自伝的要素を備えた詩であり、後の自伝的小説『断鴻零雁記』とも結びつく内容であった。しかし、彼の作品には「修辞上の重複」を持つもの(④⑥)、完璧で現実離れた女性たちとの恋愛が語られるなど、多分に虚構性を含んでいた。

なぜ、彼がこのような詩を制作したのか。柳亜子に拠れば、「本事詩」は制作後まもなく友人たちに寄せられたという(注6参照)。その友人である柳亜子・高天梅との交流が始まったのが一九〇六年、蔡哲夫とは一九〇九年であり、「本事詩」の制作年と間がない。それならば、この連作は友人たちへの自己紹介を兼ねた詩作であったということが出来る。しかし、紹介されたのは、ただの平凡な人物の見聞録ではない。何らかの悲劇的人生と多くの女性たち

との関係をほのめかす小説的な人物として、理想化された蘇曼殊像であった。英国詩人バイロンへの共感と憧憬がうさせたのだといえる。「修辞上の重複」という特徴からも分かるように、曼殊はこうした自己演出を行うことができる人物でもあり、それを肯定する文学観の持ち主でもあった。

柳亜子・高天梅・蔡哲夫は「本事詩」の和詩を作っている。その内容はすべて恋愛が主題の詩である。母親との再会を詠じた①（其二）やバイロンへの傾倒を語る⑧（其三）さえも恋愛詩と見做されている。柳亜子の和詩（『全集』第五冊）を挙げる。

⑫春病 春病 春病 春病 春病
 愛河 恨海 路 茫然
 纏綿情話無端甚 纏綿たる情話 端無きこと甚し
 亦是三生未了縁 亦是是れ三生未了の縁ならん

⑬迦葉阿難是本師 迦葉 阿難 是れ本師
 沾泥禪絮已無糸 泥に沾ふ禪絮 已に糸無し
 只愁盪氣廻腸候 只だ愁ふ 盪氣廻腸の候
 不恋佳人更恋誰 佳人を恋ひずば更に誰れをか恋ひん（其三）

ん（其三）

「春病厭厭」、「愛河恨海」、「纏綿情話」、「盪氣廻腸」、「不恋佳人更恋誰」など、恋愛を詠った詩であることは明らかである。この和詩による友人たちの反応は曼殊にとって予想以上のものであった。「本事詩」の全篇が日本の女性との往來を描出したものと見做されていたのである。本来なら出生に関するような重大事は正さなければならぬ。しかし、曼殊はそれを曖昧なままにしておける人物であった。むしろ、この友人たちの反響は作家として注目を集めるのに都合の良い事であったに違いない。そこで、曼殊は本来の制作意図を敢えて告げることにはせずに、友人たちが「本事詩」によって解釈した蘇曼殊像をそのまま受け入れたのである。そして、その蘇曼殊像は後の『断鴻零雁記』の主人公に反映されていった。言うなれば、「本事詩」は後の自伝的性格を持つ作品の雛型になった作品なのである。自伝的作品とはいえ、このような性格の曼殊であるから、事実に関しては必ずしも全幅の信頼は置けない。②などは日本の女性から恋慕を寄せられているように描いているが、これは妓女の客を放さぬための媚であったであろうと推測できる。曼殊は日本語が不得手であったという証言もある（飯塚氏著作二八五―二八七頁参照）。そんな彼が、日本の女性と心を通い合わせられたとは考えにくい。詩や筆記に

において、日本で懇意になった女性の素性を明らかにしないのがその証拠である。こうしたところからも、「本事詩」がもとより理想の蘇曼殊を演出せんとした蘇曼殊による、蘇曼殊のための、蘇曼殊文学であつたことが窺える。蘇曼殊研究の一テーマとして浸透している「言い難き恫しみ」⁽²⁾さえも、悲劇の主人公たる蘇曼殊像を印象付けるための措辞、彼特有の「修辞上の重複」であつたのかもしれない。

このことは、友人たちの和詩も含めて今後の課題としたい。

注

(1) 『伝記文学』（台北伝記文学出版社、一九七八）第三十二卷 第二期、五十一～五十三頁。

(2) 飯塚朗『断鴻零雁記—蘇曼殊・人と作品（平凡社、一九七二。以下、飯塚氏著書と略称）』及び、裴效維校点『蘇曼殊小説詩歌集』（中国社会科学出版社、一九八二）「前言」。

(3) 光緒三十三年（一九〇七）七月、日本から劉三に宛てた手紙（『全集』第一冊、一八八～一九〇頁）に拠ると、祖父母と撮った写真・母親と撮った写真・姉の写真と共に絶句一首を劉三に送付している。飯塚氏はこの写真が河合若の姉仙とその父母（曼殊の外祖父母）と撮ったものであると見做している（飯塚氏著書二八二～二八三頁。なお、この写真は『全集』第四冊にも掲載されていて、祖父母と母と美しい人物は和服を着ている）。また、柳亜子「蘇和尚雜談」（『全集』第五冊所

収）に、「劉三曾因血統問題、提起質問、曼殊含糊其詞（劉三はかつて血統の問題に関して質問を投げかけたが、蘇曼殊は言葉を濁していた）」（一八三頁）とある。

(4) 「潮音跋」は日本の飛錫という僧の作となつているが、柳亜子・柳無忌は蘇曼殊の仮託と見做している（『全集』第五冊、五一～八頁）。飯塚氏もこの跋文中の語と曼殊小説の語彙の類似性から飛錫を曼殊の筆名と推測している（飯塚氏著書二七八頁）。

(5) このほか、拙訳「蘇曼殊『本事詩十章』訳注」（国士館大学漢学会「漢学紀要」第十八号、二〇一六）がある。

(6) 「對於曼殊研究草稿的我見」（『全集』第四冊所収）に、「曼殊『本事詩』脱稿後即分寄友朋、我和高天梅・蔡哲夫都有和作……這的確是一九〇九年上半年的事情（蘇曼殊の『本事詩』は、書きあがつてすぐに友人たちに配られた。わたしのほか、高天梅・蔡哲夫に唱和した詩がある。……これは間違いなく一九〇九年前半のことだった）とある。

(7) 邵盈午注『蘇曼殊詩集』「本事詩題解」（三十八～三十九頁）を参照。なお、邵氏は「本事詩」が百助のために作られたものと解釈している。

(8) 母との再会を述べた詩を劉三に寄せている。以下はその詩題である。「東来与慈親相会、忽感劉三・天梅去我万里、不知涕泗之横流也（東来して慈親と相会し、忽ち劉三・天梅の我れを去ること万里なるに感じ、知らず 涕泗の横流する）」（『全集』第一冊、六十七頁。他本に従って「憶劉三・天梅」

と略称)。注(3)で言及されている絶句はこの作であろう。また、宣統元年(一九〇九)に、日本から劉三に宛てた手紙『全集』第一冊、二二三頁)に、「雪今侍家母旅次逗子海辺(雪「蘇曼殊のこと」今 家母に侍りて逗子の海辺に旅次す)」と見える。

(9) 「對於曼殊研究草稿的我見」(『全集』第四冊所収)。

(10) 『柳亜子選集』上冊、三二二頁。内容については飯塚氏著書二七九頁に詳しい。

(11) 「烏舍」は自注に、「梵土相伝、神女烏舍監守天閣、侍宴諸神」とある。第二句には、「引唐時女詩人韓采蘋事」という自注が付されている。曼殊の言う故事は『漁隱叢話』後集卷十六に引く「流紅記」のこと。詩を題した紅葉が男女の縁を結ぶ話。「紅葉題詩」は縁結びの典故として用いられる。注(8)の拙訳も参照。

(12) 「兀思……且殖学滋深、匪但容儀佳也、即監守天閣之烏舍仙子、亦不能逾是人矣(兀ほ思ふ……且つ学を殖やすこと滋ます深く、但だ容儀の佳なるのみに匪ず、即ち天閣を監守するの烏舍仙子も、亦た是の人に逾ゆる能はざらんことを)。」

(13) 自注に、「余贈以梵本『沙恭達羅』」とある。

(14) 自注に、「昔人詩云、『不信比來長下淚、開箱重檢石榴裙』」とある。この詩は、『如意君伝』では則天武后が別れた恋人薛敖曹に贈った詩となっている。

(15) 曼殊文中講百助・静子有幾点相合、這是修詞上の重複、大抵老和尚心目中有一種理想的美人、在文章裏描写出意中人的

時候、総用這一套話、不問本人是甲是乙。……但女郎・梵文・詩画(以及八宝飯?)、都是和尚所心愛的、遇有機縁便要拉攏在一起、那麼調爭人之於『沙恭達羅』、静子之於『波弥尼八部書』、都正是曼殊滿他心願的昼夢、我們看了微笑覺得有趣(『曼殊与百助』『全集』第四冊所収)。

(16) ③の女性像は静子像にも通じる。静子は漢文・サンスクリットに通じた才女として描かれている。また、『断鴻零雁記』第十二章において、静子は唐人の「羅浮」詩を引用して小田原の山の氣候を羅浮山に擬えている。

(17) 「余嘗作『静女調箏図』、為題二十八字、並錄(倪)雲林高士『柳梢青』一闋、以博百助眉史一粲」(『全集』第一冊、一六三頁)とある。この「静女」が「百助」なのかは分からない。

(18) 出家に関して、飯塚氏は「潮音跋」に疑問を呈し、柳亜子の年譜に拠って一九〇三年の冬、曼殊二十歳のこととしている(飯塚氏著書二九二・三三九頁)。

(19) 就有劉三來質問曼殊、……「我們向來知道你是半個中國人、半個日本人、但照飛錫的文章講起來、你變了一個完全的日本人了、究竟是怎麼樣一回事呢。你須宣布真相才好」。曼殊回答他、「這不成什麼問題、馬馬虎虎就算」(柳亜子「蘇曼殊年譜及其他」所収「對於飛錫潮音跋的意見」、北新書局、一九二七)。

(20) 「拜輪足以貫靈均・太白」(与高天梅書(庚戌五月瓜哇)『全集』第一冊、二二五頁)。

(21) 曼殊は十三歳の時に大病を患ったが、嬪嬪(叔母)等一部

の親族にまともな治療を受けさせてもらえず、柴屋に転がされていたという（注1文献第八段）。柳亜子「伝略」・飯塚氏著書などは父の第二夫人の大陳氏が虐待したと推測。

(22) 『断鴻零雁記』第一章や「潮音跋」などに見える言葉。この「恫しみ」については、血統問題、養母などにたいする怨みなど、さまざまな解釈が付与されている。飯塚氏著書にも言及がある（二九三・二九六〜二九八頁）。このほか、日野杉匡大「蘇曼殊『断鴻零雁記』考―『言い難き恫み』を中心に」（『饗養』第二十三号、二〇一五）がある。

（宇都宮大学非常勤講師）